



帯広市大正地区で、畑一面に咲く薄紫色のメークインの花(7月)

総括
[SUMMARY]

取扱高23年3573億円
さらなる高みに期待

2024年の十勝の農業は、前年ほどの酷暑には見舞われなかったが、干ばつ傾向や曇天、集中豪雨など月や日によって天候が極端で、農作物によっては影響が大きかった。

小麦は7月13～15日の高温で一気に乾燥が進み、地域や農家によって品質に差が出た。帯広や芽室など「中央部」と呼ばれる地域は細麦傾向に見舞われたが、広尾や大樹、上士幌や士幌は品質、収量とも恵まれた。でんぷん用のジャガイモは昼夜の寒暖差で生育条件が良く、ライマン価(でんぷん含量)の向上につながった。

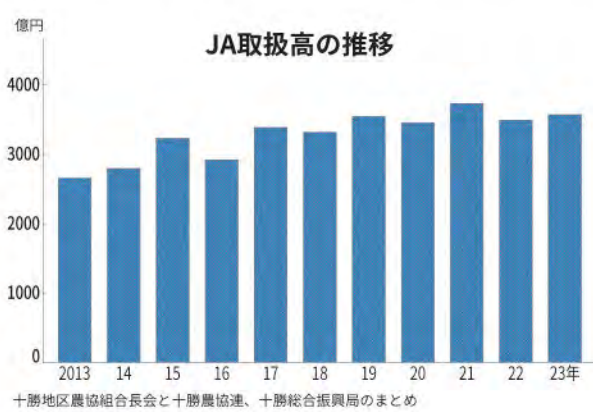
ビートは各農家による防除徹底の努力で、前年度に問題となった褐斑(かっぱん)病を抑えられた。豆類は9月以降の昼夜の寒暖差が好影響をもたらし、小豆や手亡の出来は良かった。

酪農は過去2年間の生乳生産抑制から解放され、「生産基盤回復期」として新たなステージに入る。和牛を中心とする畜産は、市場価格の低迷や飼料コスト高など難しい局面にある。

十勝地区農協組合長会と十勝農協連、十勝総合振興局のまとめによると、23年産農畜産物の十勝管内JA取扱高(概算)は3573億円。

円。災害級の酷暑でビートの糖分や生乳の生産量、小豆の品質は大打撃を受けたが、21年の3735億円に次ぐ史上2位の高水準となった。十勝らしい天候に恵まれた24年は、さらなる高みが期待される。

農業の憲法と言われる「改正食料・農業・農村基本法」が5月29日に成立した。食料安全保障の強化が柱で、業界では「持続可能な北海道農業の確立に向けた契機となることに期待する」など評価の声が多かった。同法を具体化する「食料・農業・農村基本計画」は年度内に改定予定で、その内容が注目される。



優れた耐雨性と予防効果で、ばれいしょを守る!

ランマン®プロアブル

ばれいしょの各種アブラムシに高い効果!

ウララ DF

塊茎腐敗対策に優れた効果!

単独系統の殺虫剤!